

# エルンスト・ヴィーヘルト「少佐夫人」

——「清らかな心」をめぐる——

竹 村 恭一郎

“Die Majorin” von Ernst Wiechert

——Um “reines Herz”——

Kyoichiro Takemura

## はじめに

1934年に刊行された長篇小説『少佐夫人』（Die Majorin）は、ナチス政権下で発表されたエルンスト・ヴィーヘルトの作品の中でも、あらゆる層に受け入れられたという点で、『牧童物語』（Hirtennovelle, 1935）と双壁をなす小説といえよう。発表当初からこの作品には数々の賛辞が寄せられた。日本においても1941年（昭和16年）に翻訳が出ているが、「まえがき」で訳者の小島貞介氏は次のように書いている。

帰還兵のこまかな心理を殆ど独自の形式まで描破して息切れしない、その詩魂の逞しさと、独特な形式はちょっと他に例がない。一般に多くの読者を持ったこの作者の作品の中でも、一番多く読まれていて、百版を超ゆる売れ行きを示しているのも当然であろう<sup>1)</sup>。

さらにナチス政権の指導層もこの作品を肯定的にとらえていた。というのも、1935年の女子職業学校（Frauenshule）の指導要綱には、第7学年の女子生徒にこの小説を推薦することが明文化されているのである。報告者によれば、要綱作成者（「」内の発言がそれである）は次のような評価を下している。

「この小説においてわれわれは、道徳的世界へ足を踏み入れ、健康で清らかな空気を呼吸するのだ」。『少佐夫人』は「清らかな心の福音」を知らしめ、「はっきりと实际的キリスト教精神」を証明するものであり、「その世界観察および人間の生の観察は、人と物事の評価のためのひとつの尺度を与えるものである<sup>2)</sup>」

体制側にとってこの作品は女子生徒たちの教育的効果の上で利用価値があったということで

あろう。

ところが、数々の肯定的評価の影に、ひとつの罵り言葉が『少佐夫人』に浴びかせかけられていることを戦後われわれは知ることになる。それは公の発言ではない。ひそかに個人の日記に記された感想である。

エルンスト・ヴィーヘルトの『少佐夫人』をとことろ読む。この本はうそでかためられた一冊だ<sup>3)</sup>。

この辛辣な言葉を日記に書き付けたのはローベルト・ムシルである。しかしながら『特性のない男』の作者が『少佐夫人』のどこを「うそ」と決めつけているのかはわからない。批評はこの一文のみである。単に趣味に合わなかっただけなのかと考えることもできるだろうが、筆者にはこの文章が妙にひっかかった。

この小論を書きはじめるときかけとなったのは、ムシルのこの『少佐夫人』批判を知ったことである。無視するにはあまりにも断じる調子が強く、真剣に考えようとするには短すぎる、単なる悪口ともとれる彼の感想は、テキストに即した再検討を筆者に迫るものだった。本稿では物語の流れに沿って、『少佐夫人』の中に幾度も繰り返される「清らかな心」という言葉の内実を探りつつ考察を進めていく。そしてこの作品の、今まで誰にも語られることのなかった一面をも浮かび上がらせることが出来ればと思っている。

## I

『少佐夫人』はこのような叙述からはじまる。

少佐夫人は背の低い松林のはずれに馬をとめて、沼地の向こうから近づいてくる男にじっと目をこらした。ここまで乗ってきたのは、それを見に来るためではなかった。いつも夕方になると領地の境まで遠乗りするのが日課になっていた。この癖も何年になるだろう。長くあわただしくはあるが、とても孤独な一日の終わりに、いつもここまで馬を走らせる。言葉をもてあそんでいるわけではなかったが、具体的に意味がどうのとか、さらにそれが自由奔放な望みの限界、禁じられた望みの限界などと理由づけするものでもなかったが、「境」という言葉の響きと意味に心ひかれるものがあつたのだ<sup>4)</sup>。

読み手にいきなり緊張感を呼び起こす冒頭部といえよう。主人公である少佐夫人ともうひとりの主人公である帰還兵、ミヒャエル・ファーレンホルツ (Michael Fahrenholz) がこのあと初めて出会うのが、彼女の領地の「境」においてある。この叙述から、少佐夫人は自分の生および精神の領域を限定し、「孤独」ではあるが一応安定した生活を営んではいるものの、そこから脱したい気持ちをあこがれのように抱えていることがうかがえる。だから彼女は領地の

「境」まで馬を駆ることを日課としているのだ。その「境」の向こうから「男」が近づいて来る。これから出会うであろう少佐夫人と「男」がどういう関わりを持つことになるのか。読者はいやおうなしに作品世界に引き込まれる。

帰還兵ミヒャエルは自らの身の上を問われ語りはじめる。戦争に行き負傷して捕虜となり、2度脱走を試み、2度目には歩哨を半殺しにしたかどで10年牢獄につながれ、終わりの5年は流刑になり、アフリカの砂漠の果てで道路工事を強いられた。そして早く故郷に帰りたいという気もなかったと語る彼は、故郷から出征してから20年後、ただ遠くから故郷の様子をちょっと覗いてみようというだけの気持ちで戻ってきたのだった。

このような設定こそが、ムシルの「うそでかためられた」という評言が出てくる所以なのかもしれない。普通の人間ならば自由の身になったら一刻も早く故郷に戻ろうとは思わないだろうか。加えて、ミヒャエルはこの20年の間、親元に手紙さえ出していない。「詩人ならば手紙も出しましょうが、私は詩人ではないのです<sup>5)</sup>」とその理由を述べてもいるが、これはあまりにも不自然な言い訳ではないだろうか。好意的に見れば、戦争によってそれほどまでに人間らしい感情を失ってしまったことを強調するためとも考えられるが、この設定にはどうしても不自然さがつきまとう。

しかしながら同時に、20年後の帰郷という設定は必要なものだったのかもしれないとも筆者は考える。というのも、少佐夫人とミヒャエルが出会った翌朝の彼の異様な行動に一つの妥当性を与えるための設定と考えられるからである。

それは、戦没者記念碑に記されている自分の名前を削り取るという行為である。20年も音信不通であれば死んだ者と見なされても仕方がないわけであり、当然戦死者としてその名は記念碑に刻まれることになる。ヴィーヒェルトはこの場面を、そしてこの場面を双眼鏡越しに目撃する少佐夫人の次のような思いを書きたかったために、20年後の帰郷という不自然な設定を作り出したのではないだろうか。

生きている者が死んだ者を抹殺するなんて考えも及ばぬことだった。それともあれは死んだ者が自分の命を砕いているのだろうか。冷え冷えとした朝の寒さに少佐夫人は震えてくる。すると双眼鏡の丸いレンズの中で、石碑が、繫を石に打ち込んでいる男が震える<sup>6)</sup>。

「死んだ者が自分の命を砕いているのだろうか」。怖ろしい感慨であり、少佐夫人の内面の動揺は「震える」という言葉に明らかだろう。こうして、「戦争によって一切の希望をうちくだかれ、存在の意義を見失った魂<sup>7)</sup>」の痛ましきは読み手に深く刻み込まれることになる。続いて20年ぶりに再会した父親の態度が読み手にさらに大きな衝撃を与える。父親はミヒャエルを生きている者とは見なさない。幽霊として接するのである。

「ミヒヤエルかい……」と父は言って、指先で茶色の上着をなでる。「ミヒヤエルは死んだのじゃ、倒れてるのをちゃんと誰かがみたそうじゃ……名前は記念碑にのっておる……わしはどうしたらいいんじゃないろうな、おまえが成仏するように<sup>8)</sup>」。

戦争によって3人の息子を失い、妻にも先立たれた父親は3番目の息子のミヒヤエルも死んだものと信じて疑わない。食事を共にし、畑で働いている傍らに息子がいても、「もう死人は帰る時刻ではないか<sup>9)</sup>」と思ったりしている。そんな様子を見かねて少佐夫人が近づいて行くと父親は「ミヒヤエルが帰ってきたんですよ」と告げる。しかし、父親は「奥様、怖がることはありません。死んだ連中は気のいい仲間であ」と言葉を継ぐ。少佐夫人がミヒヤエルは生きているのだと言ってもとりあわない。逆に「お力づけて下さらなくとも大丈夫です<sup>10)</sup>」と答える始末である。

息子たちを失ってしまった衝撃で、半ば精神に異常をきたしているらしい父親の姿も痛ましいが、幽霊扱いされたミヒヤエルは少佐夫人の目にはこう映っている。

せっかく帰ってきてでも死人の仲間につき返されたことがどのようにこたえたかを、黙り込んだ相手の顔から読みとるのに少佐夫人は忙しい。でも何一つ読みとれない。いろんな目に遭った人の冷たい落ち着きがあるばかりだ。この人はほとんど望んでいるものもないし、期待もしていない。さきざきのことに向ける好奇心も枯れ果てている<sup>11)</sup>。

『少佐夫人』の冒頭部は、戦争によって存在の根本を揺り動かされ、人間らしい感情を全く失ってしまった帰還兵と、同じように戦争によって精神を病んでしまった父親の姿を提示している。ミヒヤエルの今後、さらに彼の出現によって「境」で自らの生を限定して生きてきた少佐夫人にどのような変化が生じていくのか。読み手はそんな関心を惹起されるのである。

## II

前章では特語の「起承転結」の「起」の部分について若干の考察を加えながら作品紹介を進めてきた。しかしながら、ミヒヤエルの身の上を案じた少佐夫人が、所有する森を管理する狩人として彼を雇ってからの、いわゆる「承」の部分において目立つのは、すきんだ帰還兵の独白と、彼を取り巻く森の描写に代表される自然描写である。

芸術作品としてのこの本を比類のないものに行っているのは、完全なまでに清潔な全体の構成であり、強く心に訴えかける人間の造影である……。きわめて深く人間的なことに根付いていた運命を衝撃的に揺るがす体験、しかしその表現が全体において抑制が利いていること、そして語られていないことの表現しがたい魅力……。しかしながらまたその一方で、その言葉自体の輝き、像と比喩の輝き、そして作家がとりわけ愛してやまない森の描

写の輝き……<sup>12)</sup>。

東プロイセンのマズーレン地方、この森と湖の国に生まれ育ったヴィーヒェルトにとって「森」は特別な意味を持つ場所であった。自伝『森と人びと』(Wälder und Menschen, 1936)にはこんな一節がある。

森は神のあらわれであるとは、汎神論者によって使われる比喻とばかりはいわれない。神の目はいたるところに在りという子供の頃に読んだ詩を忘れ果てたときでも、森にいればその詩は再び甦ってくるのだった。森には虚偽はなく、虚栄はなく、喧噪もなかった<sup>13)</sup>。

「森」がよるべない帰還兵の再生の場としてこの上なく美しく描かれるのも、こうした「森」への想いゆえだろう。上の告白を単なる森への賛歌と評するだけでは足りないものがある。むしろこれは「信仰告白」と呼ぶに近いものだ。

ヴィーヒェルトの『メルヒェン』(Märchen, 1946)を論じた飯豊道男氏は、この作家にとって「森」の重要性を次のように述べている。

森は家の信仰、経済、日常生活、遊戯まで支配し、世界は森で始まり、森で終わっていた。そのため彼の心には、終生森がざわめきをひびかせ、森が故郷を象徴し、森が彼の世界観を形成することになった。都市の虚偽、虚栄、喧噪、野心、穿鑿、投機の対極にある自然を彼は森にみた。(中略)ヴィーヒェルトの都市への絶望は、たえず彼を森に向かわせる。森は「神の目が行き届くところ」「神の一形態」なのであって、学校や教会の与え得ないものがみいだされると考える<sup>14)</sup>。

続けて飯豊氏は『メルヒェン』に描き出された「森」を「殺害の場所、生を否定する場所とならずに、守護と慰藉を与え、再び生の申に出る用意をするところとなっている<sup>15)</sup>」と定義するのだが、「森」は『メルヒェン』だけではなく、『少佐夫人』においても同じ役割を果たしている。だが、直線的なストーリーが展開されるメルヒェンとは異なり、『少佐夫人』における「森」がすぐにミヒャエルに癒しを与え、真人間へと導くかというそう簡単にはいかない。『少佐夫人』には主人公のさまざまな心理的葛藤が独白そして対話を通して描き出されている。

森での生活をはじめたばかりの頃のミヒャエルは、住んでいる小屋の壁に空になった酒の瓶を投げつけたり、食事を運んでくれる女中を脅したり、白鳥を撃ち落したり、薪を拾いに来た年寄りを銃で追い払ったりと数々の荒っぽいことをする。そして「森」の美しさを認めながらも、人間の「秩序と規律と掟の中で生活することができなくなった<sup>16)</sup>」ミヒャエルは何度も出て行こうと考える。しかし、幼なじみで、現在は少佐夫人の使用人となっている馬丁のヨー

ナス (Jonas) の話を聞いた彼は、とりあえず森にとどまろうと決める。ヨナスは、この地方に敵兵が入って来た時期、逃げた小さな弟が沼にはまったのを見殺しにされ、溺死させてしまっただけで、沼から弟の泣く声が聞こえるようになっていた。ミハエルはそれはフクロウの鳴き声だと論するのだが、ヨナスは涙を流しながら聞き入れない。そこでミハエルは「泣き声の正体をヨナスの手に握らせて、清らかな地中に水平に埋められるようにしてやるより他に方法はない」と考え、「死人を探し出すまでは俺はここにいる」と約束するのである。

彼の約束を聞いたあとのヨナスの反応は次のようなものである。そしてこの箇所は、『少佐夫人』を考える上でのキーワードというべき言葉が初めて出てくるところでもある。

泣き声が止んで、ヨナスは眼から手を離した。「清らかな心でなきゃ駄目だよ」と彼は言った。「そうでなきゃ探せないよ。しんから清らかな心でなきゃ。心が清らかになるまでは探しても無駄だよ<sup>17)</sup>」

「清らかな心」(reines Herz)。この言葉は『少佐夫人』のみならず、ヴィーヘルトの他の作品にもたびたび登場してくるものである。人間の大きな美德のひとつであることはすぐに察しがつくが、その内実とはいかなるものか。

ヨナスから「清らかな心」でなければ死んだ弟は探せないということを聞いたミハエルは「フクロウを見つけて撃つのは、清らかな心の問題なんかではない。こっそりと音のしない足と、落ち着いた手と正確な目の問題だ<sup>18)</sup>」と考える。これは「清らかな心」のことなどともに考えてはいないということだが、なかなかフクロウを仕留められぬまま時間が経過するうちに、「清らかな心でなければならないことだけは分かった<sup>19)</sup>」と考えるに至る。

しかしながら、これだけでは「清らかな心」という言葉に、ヴィーヘルトがどんな意味を込めているのかはよくわからない。が、「清らかな心」について思いをめぐらす人間はミハエルばかりではない。それは、この小説のもうひとりの主人公である少佐夫人である。

### III

ここで、『少佐夫人』の中で具体的に名前が一度も挙げられることのない、このヒロインの身の上について触れておく必要があるだろう。男爵であり、従軍中は少佐であった、かなり年の離れた男のもとに嫁いだ彼女は、戦争中のフランスでその夫を失っている。結婚生活は決して幸せなものとはいえなかった<sup>20)</sup>。未亡人になってからは、使用人を雇って女手ひとつで領地を管理している。年齢は40くらいで息子がひとりいるが、彼は「すべてがふしだらな時代に少年の目に動揺と崩壊を見て育ち」、「みだしなみと秩序の世界に帰ることの出来ない都会の人間に成り果て、田舎の日々の営みをあざ笑っている<sup>21)</sup>」。こうして諦念の中に生き、自己のみを恃みとして、領地を守るべく気丈に采配を振るっている「勝ち気なしっかり者<sup>22)</sup>」の少佐夫人の性向が形成されたわけだが、ミハエルが領地の「境」の向こうから現われて以来、少佐

夫人の心は乱されるようになっていく。戦争によってあらゆるよりどころを失った帰還兵のすさんだ行動にその多くは困っているが、見逃せないのは酒に酔ったミヒャエルの次のような告白だろう。

奥様は誇り高い婦人でいらっしゃる。(中略) それでとてもいいことをしているつもりでおられる。いかにも少佐夫人らしいことです。でもそれはみんないわば片手間で、左手でしておられるのです。一方の右手では塵がかからないように着物の裾を押さえていらっしゃるのです。誰も住んでいない小屋と銃三挺をあてがうことは大して難しいことじゃない。(中略) それで奥様は、一流の美しいお言葉で、救護治療を施した気分でおられるのです。

でも死んだ連中には、生きている人間以上のものが要ることはどうやら忘れていらっしゃる。死人が生きてためには血潮が必要です。血管を、あるいは心を開かなければ死人の血は流れはじめません。むろん、奥様の心は高貴なもので、下僕どもや死人などにはもったいない。だから死人の分際で一切れの心が欲しいなどと言い出したら、解雇を申し渡すことでしょう。つまり死人がどれくらい色々な願いを秘めているかが分からないからなのです<sup>23)</sup>。

筆者は『少佐夫人』について語られた文章のほとんどに目を通したが、この作品を一種の変愛のドラマと捉えた視点はほとんどなかった<sup>24)</sup>。しかしながら、ここでのミヒャエルの告白をただ単に帰還兵の苦しみの告白と解するには、その口調は熱を帯びすぎていると思うのは筆者だけだろうか。確かにこの小説は帰還兵ミヒャエルの再生までの軌跡がその中心に捉えられている。しかしながら、ミヒャエルの少佐夫人に寄せる変愛感情とそれに戸惑いを覚える少佐夫人という微妙な関係を看過してはならないのではないか。例えばミヒャエルは少佐夫人の乗馬用手袋を盗んで寝台の下に隠し、それに顔を押しついたり、匂いをかいだりする叙述がある<sup>25)</sup>。その手袋を小屋で発見した少佐夫人が「栗色の顔から明るい色の盛り上がっている頭髮の生え際まで赤くする<sup>26)</sup>」場面もある。それゆえ少佐夫人はミヒャエルを避けたりもするのだが<sup>27)</sup>、ここに求愛する者とそれに戸惑う者の関係が見てとれはしないか。また少佐夫人の気持ちも揺らぎかける。ヨナスから、ミヒャエルが「清らかな心になろうとしている<sup>28)</sup>」との報告を受け、自分が「清らかな心」を持ちあわせているかどうか自問する彼女の独白に気持ちの揺れは明らかだろう。

清らかな心の持ち主なら、血がもっと静かにうつはずだ。そして柔和な姿だけを目に見るはずだ。清らかな心の人なら救護治療だけしようと思うはずで、それ以上は考えないはずだ<sup>29)</sup>。

少佐夫人はさらに「清らかな心になるのは難しい。一切の収穫を他のために取り入れて自分のためには刈らないくらいに清らかな心<sup>30)</sup>」と嘆き、涙を流したりもするのである。

ここに少佐夫人の女としての懊悩を読みとることは難しくない。しかし少佐夫人は、「息子の前で顔を赤くすることはどんな母親でも決して恥とは考えることはないにしても、自分にはとてもできない。大変な評判になることだろうから<sup>31)</sup>」と考える。同時に、「たぶん世の中には家庭と心に実りを求めないで、畑に求めなければならない女もいるのだろう<sup>32)</sup>」と嘆きもする。だが結局、少佐夫人は「境」を踏み越えることはしない。あくまで「秩序の世界」の内部に踏みとどまる。そしてミヒヤエルにこう語りかけるのである。

私を、あなたの清らかな心がなければ立ってられない人間だと考えて下さい。女を救ってやれる場合に親切にしてあげることは、一番男の心を軽くするものだと私は思っておりますわ<sup>33)</sup>。

ミヒヤエルはこの言葉を受けて、「少佐夫人を腕に抱きとろうと思うことはやめた<sup>34)</sup>」と決意する。そしてこのように彼女に語りかけられた夜、「心が清らかなになるまでは探しても無駄」といわれたフクロウを撃ち落とすことに成功するのである。

#### IV

ミヒヤエルと少佐夫人両名が「清らかな心」という言葉が口にした場面を紹介しつつその意味を探ってきたが、「清らかな心」とは他者への奉仕を行っても一切の見返りを求めない、完璧なまでにエゴイズムを排した心のあり方を指していると思われる。そうした心に人を導くものとして宗教がすぐに想起されるが、『少佐夫人』に登場する牧師を作者は実に酷薄に描き出していることに注目したい<sup>35)</sup>。ここではその一つの例を挙げておく。それは、牧師が聖書の文句を覚えていたことが20年の間おまえを力づけてくれただろうとミヒヤエルに問いかける場面だが、「暗い谷間を神の計り知れぬ定めによってさまよわねばならなかったのだからなあ」という同情の言葉に対して、ミヒヤエルはこういい返す。

残念ですがあの文句はあまり心に浮かびませんでした。それにあの谷間では浮かんだった大した効果はなかったと思います。ききめのあるのは鞭か銃剣か手銃くらいのものでしたでしょう<sup>36)</sup>。

神の教えも救いをもたらさない戦争という地獄をくぐり抜け、人間らしい気持ちをすっかり失ってしまったミヒヤエルが、どのようにすれば「清らかな心」を獲得することができるのか。宗教はなんの助けにもならないことは明らかだが、その答えは以下に引用する森の生活の描写に隠されてはいないだろうか。



夜もすっかりふけてから、狩人（＝ミヒャエル。筆者注）は小屋に戻る。何か夜の風景の簡素さの中に、同じ簡素なものが起こって、人間のことと自然のことが結ばれるのを、心の中で何か持っているものがあるのだろう。しかし待っていても苦々しいいだちはない。何も来なければ立ち上がって、畑から帰る。物言わぬ動物のように山に帰って行く。

昼間も小屋からあまり遠くには行かない。鉄砲は油を引いたまま入り口のそばにかかっている。ナイフとカゴしか持っていない。垣根の内側に、季節は植えるに適してはいないが、小さな花園を作りにかかっている。山にはいろんな珍しい草花がある、強く輝く色をした花がある。珍しい花だけではない。普通の花も一カ所に集めて、腰掛けから一目で見渡せるようにする。灰色の屋根がだんだんそれで覆われるようになる。物静かな仕事だ。落ち着いた手と深い愛がなければ、移された場所ではよく育たない。探して持って帰って色々と世話をする。この特静かさが狩人にはいい。ともかく何かしていなければ、次々と続く長い日々がうつろになるし、次第にその空虚さの中に暗い思いがすぐ根を下ろす。（中略）それでやっと夜の鳥が鳴いても別に心も痛まず、ああまだいるなと考えるだけになれるのだ<sup>37)</sup>。

自然の象徴たる「森」の中で、「小さな花園」を作り、「落ち着いた手と深い愛がなければ」充分に育たない草花の世話をするミヒャエルは、この「物静かな仕事」を尊いものと考えはじめている。自然の中の小さな生命に献身をなし、絶えず「腰掛けから一目で見渡せるように」しておくことによってその成果を目の当たりにするうちに、「夜の鳥が鳴いても別に心も痛ま」なくなってくる。これはすなわち自分も自然の一部という認識が芽生えてきたことを意味しないだろうか。もちろん荒んだ心の「空虚」を埋めるためにはじめたことではあるが、そこからミヒャエルが、自分以外のもののために生きること、すなわち「清らかな心」を得る可能性があることが示唆されている。さらに彼は、夕刻から夜ふけまでは畑のへりにいて「人間のことと自然のことが結ばれる」瞬間を待ち望むようになってもいる。「人間のことと自然のことが結ばれる」。ヴィーヒェルトはいささか抽象的な言い回しを使っているが、この表現も、田畑に対するささやかな献身が実りをもたらすことを意味しているのだろう。さらに言葉を継げば、それを「人間」の存在も、「自然」のサイクルと相反するものではないという認識と言換えることも可能であろう。

こうしてここに「大地の永遠の力の、決して消え去ることのない魔法によって<sup>38)</sup>」存在の根というべきものが断ち切られてしまった人間の再生の道が開かれることになる。そのきっかけとなったのは猟師として森の中で「清らかな心」を意識しはじめたことであるが、もともとは農民の子であるミヒャエルが、森で生活しているうちに「山には似つかわしくない」という思いを抱くようになるのも、再生の第一段落として十分に納得できることである。そして、自分は「山のために生まれて来た人ではない<sup>38)</sup>」ではないという思いが浮かんできた直後（少佐夫人を

「腕に抱きとること」を断念した日の夜), ヨーナスを苦しめるフクロウの鳴き声が突如響きわたり, ミハエルはそれをついに仕留めるのだ。

ミハエルが「清らかな心」を得たことを象徴するこの場面が続くのはこんな独白である。

獵師のミハエルよ, 山から出て行くがよい。麦畑に行くがよい。あそこには違う鳥が呼んでいる, 穀物を狙っている鳥が<sup>40)</sup>。

ここによりやく, あるべき自己の使命に目覚めるミハエルの姿を見てとることができる。「清らかな心の福音」は『少佐夫人』において, このようなかたちで訪れるのである。むしろこれは作者の, 「森は神のあらわれである」という想念の具象化に他ならない。

誰もが認めるヴィーヘルトの「森」の描写の美しさ。それは森の治癒力への彼の絶対的信仰に基づくものだといっても過言ではないだろう。

## V

こうしてミハエルは森を出て畑に戻ることになる。しかし, 最後に物語上でもう一つの事件が語られる。それは年老いた父の突然の発病である。

ミハエルが死んだと思いこんでいる年老いた父のことは先に触れたが, フクロウを撃ち落とした翌朝その知らせはもたらさせる。ずっとミハエルの父親が教会に来ていないことを気にして、自分の責任を問われることを恐れた牧師が, 「ミハエルは生きている」と話をし, 彼は父親に死人扱いされてしまい家に入れてもらえないので粗暴な振る舞いをするようになって、と語り聞かせると父親はぶるぶると震え出す。生きている証拠だとミハエルが自分の名を削り取った戦没者記念碑に連れていく途中, 父親は牧師たちに斧で突然打ちかかる。ついに父親は発狂状態に陥ったわけである。

ミハエルは牧師にこう告げる。「牧師さんはどうやら, 心の中へ出血している人々の扱いにはむかないようですね<sup>41)</sup>」。ヴィーヘルトが宗教に対して, 冷ややかな距離を置いていたことがここにもあらわれている。

父の発狂がもたらした心の動揺もあり, ミハエルは一旦は森を出ることを躊躇する。しかしながら, ここで彼の再生に力を貸すのは少佐夫人である。彼女は耕す人がなくなった父親の畑の前で, 麦を刈り取る道具である大鎌を渡す。20年も手に取ったことがない, もう使えなくなっていると戸惑うミハエルを励まし, 刈り取りの作業へと促す。おそろおそろミハエルは鎌を振り下ろす。

この最初の一刈りで非常に大きな幸福感がひたひたと胸にあふれ, 獵師は自分の後に立って待っている少佐夫人のことを忘れてしまう。少佐夫人が手をあわせているのが獵師には見えない。森も家も老いた父のことも忘れてしまう<sup>42)</sup>。

こうして帰還兵ミヒャエルは自らの本来の使命である「畑を耕す人」へと再生を果たすのである。「非常に大きな幸福感」を感じるミヒャエルと「手をあわせて」その姿を眺めている少佐夫人の姿には、もう緊迫した恋愛感情の息苦しさは見いだせない。そしてこれからの両者の関係がどうなるのか、それを暗示するやりとりが続く。発狂した父が住んでいた家に住むことを命じた少佐夫人の言葉に続く対話である。

「あの家は空虚な家です。おわかりになりませんか。奥様」

少佐夫人は猟師の顔に両手を添えてゆっくりと言う。「母親がいて空虚な家ということはありませんよ<sup>43)</sup>」

「母親」という立場を設定しそこからミヒャエルに愛情を捧げること。ここに少佐夫人は「清らかな心」を獲得するための手だてをえたと考えられはしないだろうか。ミヒャエルの再生は果たされた。そして少佐夫人は「女」としてではなく、「母親」として、すなわち「境」を踏み越えることなしに、かろうじて「秩序の世界」の中で自らの「清らかな心」を完成させようとする。「恋愛感情に対する母性の静かな勝利<sup>44)</sup>」はここに確かなものになり、こうして『少佐夫人』の主人公ふたりの「清らかな心」をめぐる苦闘は一応の決着を見るのである。

けれども、『少佐夫人』のラストシーン、農夫に帰ったミヒャエルの姿を見届けて屋敷に戻る少佐夫人の描写には、「女」として生きることを断念した寂寥感が漂っている。冒頭と比較すれば作者の意図は明らかだろう。

ようやく少佐夫人は白い階段を登る。石の上にももの言わぬあかりがさしている。扉の取っ手の冷たい金属に手をかける前に、もう一度振り向く。幾棟かの屋根が月の光が流れ込む広い中庭のまわりに黒々と急な傾斜をみせていて、庭の隅から鋤がひとつガラスのように光っている。大きな世界が少佐夫人の足元で眠っている。(中略)

やがて少佐夫人はずっと肩口に掛けていた白い布をとき、毅然として、静まり返った誰もいない大きな家の中に入っていく<sup>45)</sup>。

冒頭で馬を「境」まで走らせた少佐夫人は、結末で「静まり返った誰もいない大きな家の中に入っていく」。ここにはひとつの断念がある。しかしその前にうしろを振り返ると、周囲の暗さの中で、大地を耕す尊い道具である「鋤がひとつガラスのように光」り、「大きな世界が少佐夫人の足元で眠っている」。ここに、少佐夫人がどこから慰めを得、なにをよりどころにしてこれから生きていくことになるのかが示されている。「大地の永遠の力」の再認識があるからこそ、実生活では孤独を余儀なくされるとはいえ、少佐夫人は「毅然として」筋度ある生活の中に戻ることができるのである。

## おわりに

物語を仔細に考察してきたが、これまで『少佐夫人』という作品は、どうしても帰還兵ミヒャエルが農夫に戻るまでの道筋ばかりに注目が集まり、その再生を促すものとして自然（特に「森」）や母性の治療力が語られてきた観がある（記者の小島氏も「少佐夫人」と訳さずに、「帰農兵」とミヒャエルに重きを置いたタイトルを創出しているのもその証左といえる）。

しかし「清らかな心」に思いをめぐらすのはミヒャエルだけではない。彼を導く存在として聖化されがちな少佐夫人にも、生身の女性としての苦悩があり、動揺がある。この少佐夫人の心の動きを見過ごすことは、作品理解の幅を狭めることにつながりはしないか。このことも念頭に置きながら筆者は考察を進めてきたが、「ヴィーヘルトの作り出した女性像」というテーマは一考に値すると今改めて考えている。これについては別の機会に論及してみたいと思う。

## 註

エルンスト・ヴィーヘルトのテキストはすべて、Wiechert, Ernst: Sämtliche Werke in zehn Bänden München 1957 (=SW) に拠った。なお、ギド・ライナーによってまとめられたヴィーヘルトについての論評集というべき、

\*Reiner, Guido: Ernst Wiechert im Urteil seiner Zeit, Literaturkritische Pressestimmen; Ernst-Wiechert-Bibliographie 3. Teil, Paris 1976

\*\*Reiner, Guido: Ernst Wiechert im Wandel der Zeiten; Literaturkritische Beiträge; Ernst-Wiechert-Bibliographie 4. Teil, Paris 1982

以上2冊から引用したものについては、初出誌および初出紙を記したあと、続けて（ ）内にこの論評集の引用ページを記した。

- 1) 小島貞介「まえがき」（エルンスト・ヴィーヘルト『帰農兵』小島貞介訳、『新世界文学全集13』所収、河出書房 昭和16年）7頁。
- 2) Knust, Hermann: "Die Majorin" in der Obersekunda einer Frauenschule. In: Zeitschrift für Deutschkunde (50), H. 4. 1936, S. 233 f. (\*\*Reiner: Ernst Wiechert im Wandel der Zeiten, S. 123).
- 3) Musil, Robert: Tagebücher, Hrsg. von Adolf Frisé, Heft 32 (etwa Frühjahr 1939-etwa Ende 1941). Hamburg 1976, S. 992.
- 4) Wiechert: Die Majorin. SW. 4, S. 181.
- 5) SW. 4, S. 188.
- 6) SW. 4, S. 200
- 7) 本林達三「感傷について [ヴィーヘルトの作品における自然について]」（『内山貞三郎教授古希記念ドイツ文学論集』大阪大学文学部独文学研究室, 昭和41年）215頁。
- 8) Wiechert: Die Majorin. SW. 4, S. 206.
- 9) SW. 4, S. 209.
- 10) SW. 4, S. 211.
- 11) SW. 4, S. 212 f.
- 12) D.H. Sarnetzki: Von deutscher Erzählkunst; Ernst Wiechert: "Die Majorin". In: Kölnische Zeitung, 4.11.1934 Nr. 559 C. (\*Reiner: Ernst Wiechert im Urteil seiner Zeit, S. 37.)
- 13) Wiechert: Wälder und Menschen. SW. 9, S. 104.
- 14) 飯豊道男「老婆と小びと—ヴィーヘルトの『昔話』—」（『ドイツ文化』第9号, 中央大学ドイツ学会, 昭和44年）27頁。

- 15) 同上
- 16) Wiechert : Die Majorin. SW. 4, S. 216.
- 17) SW. 4, S. 256.
- 18) SW. 4, S. 257.
- 19) SW. 4, S. 294.
- 20) 少佐夫人は自分の息子のことを「なんの愛情もなく身ごもった子供」と考えている。Vgl : SW. 4, S. 195 f.
- 21) SW. 4, S. 196.
- 22) SW. 4, S. 197.
- 23) SW. 4, S. 285.
- 24) わずかに千代正一郎氏が「やがて兩人の間には恋愛に似た感情すら生じたのである。それは普通の恋愛ではないかも知れない。しかしやはりそれに近い感情であった」と、ミハエルと少佐夫人の関係に言及している程度である。  
千代正一郎「ヴィーヘルトの『マヨーリン』 覚書―捕虜文学について―」(『独仏文学研究』第5号, 九州大学, 昭和30年) 71頁。
- 25) Wiechert : Die Majorin. SW. 4, S. 258.
- 26) SW. 4, S. 262 f.
- 27) 少佐夫人はミハエルを解雇することも考えたりする。Vgl. SW. 4, S. 270.
- 28) SW. 4, S. 295.
- 29) SW. 4, S. 298.
- 30) Ebenda.
- 31) Ebenda.
- 32) SW. 4, S. 302 f.
- 33) SW. 4, S. 306.
- 34) SW. 4, S. 308.
- 35) ヴィーヘルトの母親の死に際して、それが自殺だという理由で教会は弔鐘を鳴らすことを拒んだ。この私的体験が作家の教会観を否定的に決定づけたことは間違いない。  
Vgl : Wiechert : Jahre und Zeiten. SW. 9, S. 447.
- 36) Wiechert : Die Majorin. SW. 4, S. 241.
- 37) SW. 4, S. 293.
- 38) D.H. Sarnetzki : Von deutscher Erzählkunst ; Ernst Wiechert : "Die Majorin", In Kölnische Zeitung, 4.11.1934 Nr. 559 C. (\*Reiner : Ernst Wiechert in Urteil seiner Zeit, S. 37.)
- 39) Wiechert : Die Majorin. SW. 4, S. 310.
- 40) SW. 4, S. 311.
- 41) SW. 4, S. 329.
- 42) SW. 4, S. 352.
- 43) SW. 4, S. 354 f.
- 44) Kalkschmidt, Eugen : "Die Majorin". In : Zeitwende (11), H. 3, Dezember 1934, S. 178.  
(\*\*Reiner : Ernst Wiechert im Wandel der Zeiten, S. 107)
- 45) Wiechert : Die Majorin. SW. 4, S. 356.

『少佐夫人』からの引用は、小島貞介訳『婦農兵』を参考にさせていただいた。また、「まえがき」からの引用についてはすべて現代仮名づかいに改めた。